TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　374語

Why the Juniper has Berries

どうしてネズの木には実がなるの？

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：D.Scott

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　クマのフーツがやってくる！ 白・赤・緑のクランベリーの三姉妹は、それぞれちがう場所にかくれることにしますが……。



Three cranberries once lived together in a meadow. They were sisters, but they did not look alike, for one was white, and one was red, and one was green. Winter came, and the wind blew cold. "I wish we lived nearer the wigwam," said the white cranberry timidly. "I am afraid that Hoots, the bear, will come. What should we do?"

"The women in the wigwam are afraid as well as we," the red cranberry said. "I heard them say they wished the men would come back from the hunt."

"We might hide in the woods," the green cranberry whispered.

"But the bear will come down the path through the woods," replied the white cranberry.

"I think our own meadow is the best place," the red cranberry said. "I shall not go away from the meadow. I shall hide here in the moss."

"I am so white," the white cranberry wailed, "that I know Hoots would see me. I shall hide in the hominy. That is as white as I."

"I cannot hide in the hominy," said the green cranberry, "but I have a good friend in the woods. I am going to ask the juniper-tree to hide me. Will you not go with me?" But the red cranberry thought it best to stay in the moss, and the white cranberry thought it best to hide in the hominy, so the green cranberry had to go alone to the friendly juniper-tree.

By and by a growling was heard, and soon Hoots himself came in sight. He walked over and over the red cranberry that lay hidden in the moss. Then he went to the wigwam. There stood the hominy, and in it was the white cranberry, trembling so she could not keep still.

"Ugh, ugh, what good hominy!" said Hoots, and in the twinkling of an eye he had eaten it up, white cranberry and all.

Now the red cranberry was dead, and the white cranberry was dead, but the little green cranberry that went to the juniper-tree had hidden away in the thick branches, and Hoots did not find her. She was so happy with the kind-hearted tree that she never left it, and that is the reason why the juniper-tree has berries.

むかし、三つぶのクランベリーが、草原でいっしょにくらしていました。三つぶは姉妹でしたが、ちっとも似ていませんでした。ひとつは白、ひとつは赤、ひとつは緑だったのです。冬が来て、つめたい風がふきました。「テントの家のもっと近くにすんでいたらよかったのに」と、白いクランベリーがこわごわ言いました。「クマのフーツが来るんじゃないかと、こわいの。どうしたらいいかしら？」

「テントの家の女の人たちも、わたしたちと同じようにこわがっているわ」と赤いクランベリーが言いました。「男の人たちがかりから帰ってくればいいのに、と話しているのを聞いたもの。」

「森にかくれたらどうかしら」と緑のクランベリーがささやきました。

「でも、クマは森の小道を通っておりてくるわ」と白いクランベリーが答えました。

「わたしは、自分たちの草原がいちばんいい場所だと思うわ」と赤いクランベリーが言いました。「わたしは草原からはなれない。ここのこけの中にかくれるわ。」

「わたしはこんなに白いから」と白いクランベリーは泣き声で言いました。「きっとフーツに見つかってしまう。トウモロコシのおかゆの中にかくれるわ。あれなら、わたしと同じくらい白いもの。」

「わたしはおかゆの中にはかくれられないわ」と緑のクランベリーが言いました。「でも、森にいい友だちがいるの。ネズの木に、かくしてくれるようたのんでみる。いっしょに来ない？」けれども、赤いクランベリーはこけの中にいるのがいちばんだと思い、白いクランベリーはおかゆの中にかくれるのがいちばんだと思ったので、緑のクランベリーはひとりで、親切なネズの木のところへ行くことになりました。

しばらくすると、うなり声が聞こえて、まもなくフーツがすがたをあらわしました。フーツは、こけの中にかくれていた赤いクランベリーの上を、何度も何度もふみつけて歩きました。それからテントの家へ行きました。そこにはおかゆがおいてあり、その中には白いクランベリーが、じっとしていられないほどふるえていました。

「うおう、うおう、なんてうまいおかゆだ！」とフーツは言って、あっというまに、白いクランベリーごとおかゆを食べてしまいました。

こうして赤いクランベリーも白いクランベリーも死んでしまいました。でも、ネズの木のところへ行った小さな緑のクランベリーは、しげったえだの中にかくれていたので、フーツに見つかりませんでした。緑のクランベリーは、心のやさしい木といっしょにいるのがとても幸せで、それからずっとはなれませんでした。だから、ネズの木には実がなっているのです。

たんご と クイズ　どうしてネズの木には実がなるの？

cranberries クランベリー	**bear** クマ	**meadow** 草原
moss こけ	**wigwam** （北アメリカ先住民の）テントの家	**juniper-tree** ネズの木
berries 木の実		

Q1 白いクランベリーがかくれた場所は？

① こけの中　② ネズの木　③ トウモロコシのおかゆの中

Q2 三姉妹がこわがっていたのはだれ？

① クマのフーツ　② オオカミ　③ かりゅうど

Q3 フーツに見つからなかったのはどの子？

① 赤いクランベリー　② 緑のクランベリー　③ 白いクランベリー

こたえ

Q1 ③ 自分と同じくらい白いからと、白いクランベリーはおかゆ（hominy）の中にかくれました。

Q2 ① 三姉妹は、クマのフーツ（Hoots）が来るのをこわがって、それぞれかくれる場所をさがしました。

Q3 ② ネズの木のしげったえだにかくれた緑のクランベリーは、フーツに見つかりませんでした。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：D.Scott（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。